

誰も来ない図書館

土屋俊

(千葉大学)

東京西地区大学図書館相互協力連絡会研修セミナー

(2007年6月29日、首都大学東京)

タイトルの意味

- 利用者にとっても前提：
 - 来ないことはよいことだ
 - 来なくても用がたりる
 - すべてがオンラインですむ
- 図書館にとって：
 - 来ないことは困ったことだ
 - 来ないことは良いことなのかもしれない
 - 来ないですむように整備してきたのだから目標を達成したといえる
 - そもそも図書館サービスとは？

本日の骨子

- 利用者についてわれわれは知っているのか
 - 教室へはいやでも行くが、図書館は行く必要がない
- キャンパスの「情報化」「電子化」はわざわざ図書館に行く必要を減らしている
- わざわざやらなければならことをしなくなるのはよいことだ
- したがって、図書館に誰も行かなくなるのはよいことだ(もともと来ていなかったかどうかは別にして)
- その上で、図書館のサービスが教育・研究支援であることは変わらないとしたときの図書館の役割とは？

誰が来ないのか？

誰も来ない

- 教員が来ない

- 研究室からウェブに接続できれば十分

- ほとんどの情報はインターネットから無料で得られる

- 参照が必要な図書、論文もインターネットから無料で得られる⇒いくらなんでもこれは誤解だろう

- 研究室のほうが居心地が良い

- 図書館では仕事をしながらコーヒーが飲めない

- すぐにカラーでプリントアウトがしたい

- 一般市民利用がうっとうしい

- 学生が来ない

- 研究室からウェブに接続できれば十分

- ほとんどの情報はインターネットから無料で得られる

- 参照が必要な図書、論文もインターネットから無料で得られる

- 図書館に来ても勉強にならない

- 図書館では勉強をしながらコーヒーが飲めない

- 一般市民利用がうっとうしい

- 図書館には本がない

さまざまな統計 ⇒ 統計の意味？

- アメリカの大学のクラスでの調査
 - 学生は“インターネット”で十分と考えているとする調査がたくさん
 - いろいろ見ると、半分は「時々」、4分の1が「頻繁」、残りの4分の1が「全然」
- 日本の大学での調査
 - いろいろあるが、来館者対象がほとんど（来館者の属性も十分には把握できていない） ← サービス改善が主目的？
 - その上で、アメリカと同じか少なめ
- しかし、実際は調査になっていない
 - 来ない人を調査対象とすることがきわめて困難
 - 来た人には、もともと来ようとする意図、動機、目的、根性が備わっている（はず） ⇒ もちろんそのような人が不満足では困るけど、、、
 - とくに、意識調査では自分を理想化して返答

学生は情報収集のために努力しない

⇒ 図書館に来る学生を見ているとそうでもないが、、、

- 大学生が新聞を読まないのは普通（日米共通）
 - － 9割は読まないという統計もある
 - － テレビがあり、ウェブでニュースが見られるのでさらに読まない
 - － 結局、友人からの情報が重要な役割をもつ
- 学生に参考文献を紹介することは不毛
 - － どうせ見に行かない
 - － (なんと、) 図書館へ行っても見つからない
- 図書館では学生に必要な本を集めていない
 - － 集めても、1冊の本で50人のクラスをまかなえるはずがない

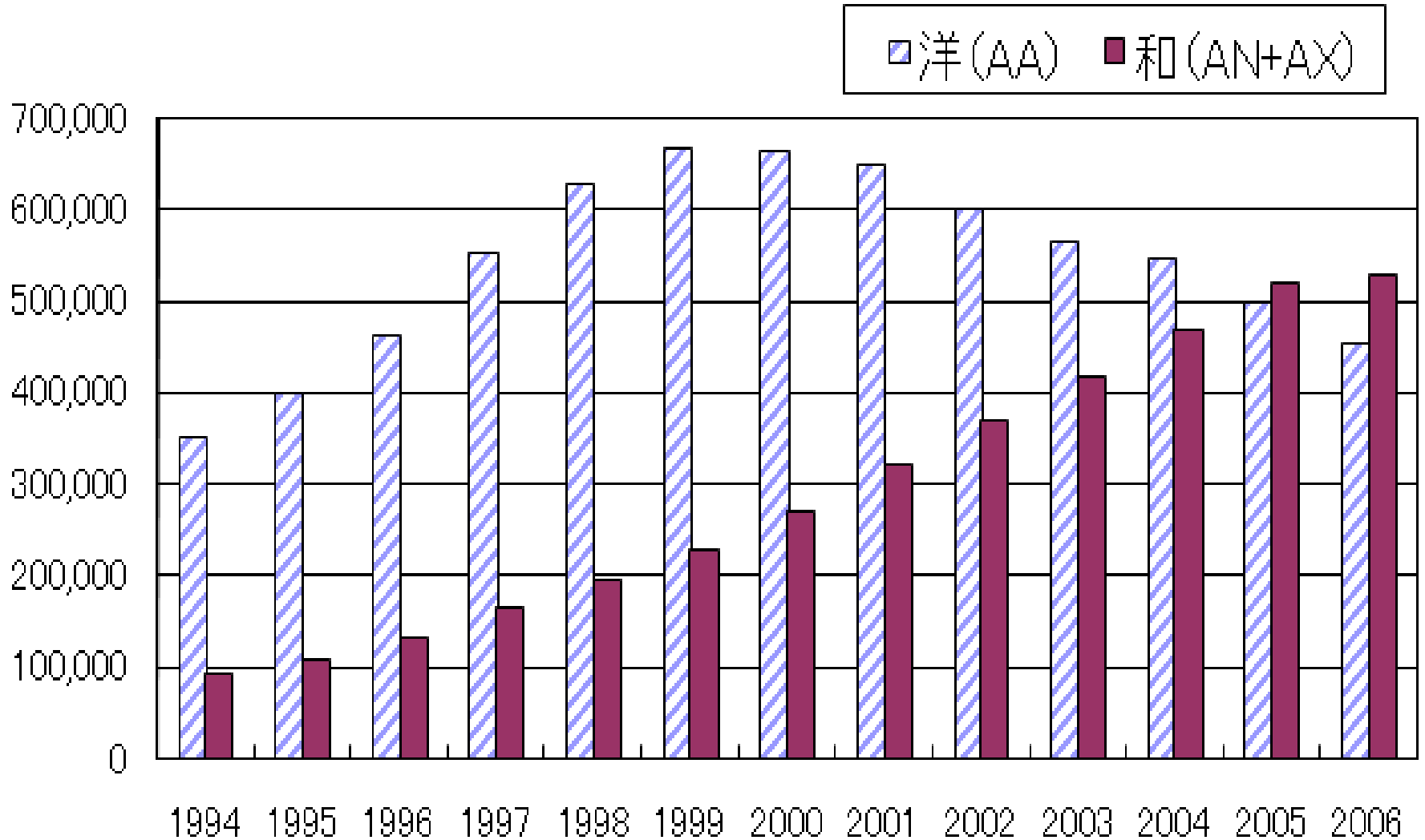
教員だって、本を読まない

- 理系の教員は普通本を読む教育を受けていない(少なくとも日本では)
 - 中等教育の問題だが、高等教育でも促進している
- 文系の教員も、あまり知識への関心があるわけではない(これも教育の問題だが、、、)
 - とくに、自分がやってきた勉強方法が正しい、唯一であると信じがちである(図書館の人と同じだろう)が、ほとんどの学生はそんなに「まじめ」ではない
- したがって、必要な新刊書の購入を教員が自発的に行うことはない。これに加えて、すぐに版元品切れになる今の日本の出版事情

問題の原因の整理

- 知識伝達の電子化・オンライン化は、図書館に
来ないですむような動機をもたらしている
 - 研究室、教室で直接（洋雑誌ILLの減少は象徴的）
 - CD-ROMはすでに完全に過去の技術
- 知識伝達の電子化・オンライン化は、図書館の
保存、管理機能を不要にしつつある
- もともと、日本では教員も学生も大学図書館を
必要としていない
 - 教員はみずからが図書館員の役割を果たしてきた
 - 学生は、教室で教科書を飲み込むことが勉強だった

ジャーナル電子化による外国雑誌ILLの減少



残っている課題

- 図書館に来ない教員にアプローチするのは簡単（電話と訪問）だが、来ない学生にどうやってアプローチするのか
 - 授業経由しかない ⇒ 授業を変えるしかない
- 電子資料の使い方は、いつ誰にどうやって教えるのか
 - 授業経由しかない ⇒ 授業を変えるしかない
- 残された課題に図書館の課題はない
- それならば、図書館から大学の教育をかえられないだろうか？

千葉大学での経験

- とりあえず「パスファインダー」
 - 1科目1パスファインダーを目標(オンライン・印刷)
 - 最初の仕事は、教員への連絡・情報提供依頼(これがけっこう難航したように見えた)
 - 教員が挙げてくる本が図書館にない ⇒ 買うか、変更するか、電子化許諾に向かうか
 - Wikipediaなどをどう考えるか? JapanKnowledgeは?
⇒教員に考えさせる
 - 現在検証中(ワークショップ、ダウンロード統計等)
- 当面の教訓: 教員は図書館を知らず、図書館は教員を知らない。必要は本はなく、リクエストもない

来ないならば、出ていくしかない

⇒ 教育・研究への「直接的」関与

- 情報リテラシー教育はもうやめよう！
 - どうせ学生の身には就かない図書館側の自己満足
 - まじめに受講する学生は、どうせ自分で身につける（そして、そっちのほうがもっと役に立つ）
- むしろ、普通の授業が図書館機能を利用することによって向上されるかを考えてあげることが必要
 - なぜならば、教員は結局はたんなる成功者
 - やはり、学習支援ではなく教育支援をしないといけない
- 教員とのコミュニケーションがすべて
 - 実はこれは「機関リポジトリ」でも同じだった

場所としての図書館の再考(とくに国立大学)

- 図書館にコーヒーショップを導入するのはやめたい
- むしろ、コーヒーショップに図書館機能をつける
 - 将来はいずれにせよ紙の本はなくなる
 - 真剣な研究は、教員は研究室でやるようになる
 - 学生に必要なのは結局「たまり場」
 - かつ、学内では、図書館はたまり場として良い環境
- 図書館全体を静かにする必要はない
 - 静かな場所は、特別な場所。普通は騒がしくてよい
 - そういう空間ならば学生も自衛するだろう(なまじ安全そうに見えるのが良くないのかもしれない)
- 図書館の顧客満足度の議論するのは、大学としては不適當。大学の顧客は学生ではなく、親であり、社会(つまりスポンサー)



Think @.com
FEB 13

ΘΧ
THETA CHI

BOOKSTORE

Ζ
K
Zeta
Tau
Alpha

WELCOME
to Seattle

Fusion
Academy
WELCOME to Seattle

2003 2 1



E-MAIL EXPRESS

EX

Fusion Academy

ΑΣΠ

Think
Want
Teacher?

FEB 13

CATHOLIC
CAMPUS MINISTRY
MASS
TIMES

SATURDAY 5:30pm
SUNDAY 11am - 2pm - 10pm

713-425-0

UNCLE

2003 2 1

LIBRARY

2003 2 1

STEPHEN A. McCARTHY ROOM

2003 1 28









LIBRARY

MAGAZINES

REFERENCE

MAGAZINES
REFERENCE
COLLECTION

PRINT
STATION

**CIRCULATION
and
RESERVES**

stairs
→



**GENERAL
COLLECTION
D-A**

EXIT





HELP WITH RESEARCH

Quiet Study
Please
NO
Cell Phones

結論、またはお願い

- 図書館には誰も来なくなる
 - 来たとしても、図書館に来たのではなく、たまり場に来ただけ
- これは、あらゆる意味で進歩、よいことである
 - すべての資料が電子的に入手できることを意味する
 - 特別な場所で学習するのではないことを意味する
- そのためには、図書館が大学を変えるという観点で、
 - 図書館を出て教員と話してほしい。教員は、実は相当孤立しているので話し相手いるだけでもうれしい
 - 学生には厳しく対応してほしい。甘やかすのはだめ